

テサロニケ人への手紙 #11

「キリストの空中再臨と教会の携挙」 | テサロニケ人への手紙 4章 13節～18節

2020.11.8

はじめに

パウロはテサロニケ教会の兄弟姉妹に、彼らの信仰と愛をほめながらも、二つの勧めをしました。それは「聖くなること、愛し合うこと」でした。少しおさらいすると、聖くなるとは、性的な聖さを保ち、配偶者を大事にすることによって、他の兄弟姉妹の家庭を壊すようなことはしないことでした。愛し合うとは、主がいつ再臨されてもいように兄弟愛を深め、社会人として与えられた仕事に身を入れて、キリストの証し人として落ち着いた生活をするということでした。

今日のところでは、この二つに加え「励まし合うこと」が薦められます。ここからパウロは、彼が去った後にテサロニケの人々の中で起こった主の再臨に関する二つの疑問に答えていきます。第一の疑問は、すでに死んだ信者の運命について (4:13-18)、第二の疑問は、いつ主が来るのかという問題(5:1-11)です。今日は第一の問題について取り上げていきます。

さて、日本の宣教の課題は「家族の救い」だと言われます。私どもの教会は家族で救われている方が多く、主に感謝であります。しかしそれでもまだ救われてほしい家族、親族がたくさんおられます。福音を信じて救われるように語ると、次のような心の抵抗を多くの方が抱かれます。「もし私だけが救われて、他の家族が救われなかったらどうなるのか？私は天国に永遠にいて、先祖や家族は永遠に地獄なんてことは耐えられない。」という葛藤です。もし他の家族が地獄に行くのなら、自分も地獄に行ってもかまわない。と思う人たちさえいます。実にこれは日本人らしい家族意識です。

そのような日本の中にも、岩手の三陸地方には、私たちクリスチャンが持っている家族意識と似たような知恵があります。それは「津波てんでんこ」というものです。この地方は昔から津波の被害にあってきました。そこでこのような言い伝えがあるのです。「てんでんこ」とは「めいめいに」「各自」という意味です。つまり「津波が来たら、取るものもとりにあらず、肉親もかまわず、各自てんでんばらばらに一人で高台に逃げろ」という言い伝えです。これは一見利己的な考え方に思えますが、実はそうではなく、津波の恐ろしさをよく知っている人たちの、家族を思う知恵なのです。地震が起って津波が来るまでに、家族を助けに行こうとすれば、確実に津波に襲われてしまいます。そうすると自分が救われないうばかりではなく、家族も救うことができません。しかし家族が事前に「津波の時ではてんでんこしよう」と約束していれば、その信頼関係の中で、自分が高台に逃げるときも、愛する家族も同じ高台に逃げているだろうと信じることができるのです。

事実 2011 年の東日本大震災の時には、釜石の小中学生の生存率は 99.8%という驚異的なものでした。子供たちに促されて非難して助かった住民も多くいたそうです。そして子供たちの家族の多くも高台に非難して助かりました。この写真は実際に東日本大震災の時に「津波てんでんこ」の教えに従い、小学生を誘導しながら非難する中学生です。釜石の全小中学校では授業で「家族のことは気にせず、てんでばらばらになって逃げて、自分の命を守りなさい。高台で待てば、いつか必ず迎えが来る。」と教えられていたのです。

彼らはそれぞれ、まず自分が救われることを考えました。自分の命に対して責任のある行動を取りました。そして愛する家族も同じように、それぞれが自分の命に責任を取ってくれると信頼したのです。これこそが真実な家族の結びつきではないでしょうか。私たちキリスト者はキリストにあってそのような信頼関係を持っています。私たちが救われるのは、滅びゆくこの世から救われるのであり、私たちが救われる高台は主ご自身がおられる天であります。私たちは、それぞれ一時、生き別れがありますが、けれども必ず主はもう一度来られ、キリストにあって再開することになります。

1. 眠っている人々

4:13 眠っている人々については、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。

ここで**眠っている人々**とは、イエスキリストを信じて死んだクリスチャンのことです。聖書では、信者の死をしばしば、このように呼びます。これは旧約聖書から使われている用語で、信者の死は労苦から解放されて休息するという点、やがて栄光の中で目覚めるという 2 点において**眠っている**と表現されました。

パウロが去ってから、テサロニケ教会の中で死んだ信者たちがありました。教会ではこの死んだ信者たちの運命は一体どうなるのだろうかと不安に思ったわけです。彼らは主の再臨はすぐにあるだろうと信じていました。そして、主の再臨の時に生きている者だけの救いが完成されると考えました。すでに死んでしまった信者たちは、主の再臨には与れず、滅んでしまうのではないかと誤解し、悲しんでいたのです。今そのように考える人はありませんが、彼らは十分に理解できていなかったのも、愛する者と永遠に引き裂かれてしまうのかと悲しんだわけです。冒頭でお話した、福音メッセージを聞いた多くの日本人がもつ感情と同じです。

望みのない他の人々とは、クリスチャンではないテサロニケ人のことですが、彼らは肉体とは靈魂を縛る牢獄と考えていて、現世には望みがあるが、来生には望みがないと考えていました。つまり死んだら何もかも終わりというわけです。現代でも多くの方がこのように信じておられます。パウロは**望みのない他の人々のように悲しまない**ために、すでに死んだ信者がどうなるのかを正しく教えようとしています。

あなたがたに知らずにいてほしくありません。 パウロが何か重要なことを話すときの決まり文句です。パウロが手紙の中でこのように書いている箇所は4つあります。

- ①ローマ書 11 章の「イスラエルの救い」に関して
- ②1 コリント 12 章の「御霊の賜物」について
- ③II コリント 1：8 の「キリスト者の試練」について
- ④そしてこの 1 テサロニケ 4：13 の「携挙と再臨」についてです。

皮肉なことにこれらはどれもキリスト教会では遠ざけられる傾向にある話題です。しかし、パウロはこれらの事について、キリスト者は無知でいてほしくはない。と書いているのです。

ここでは死者についてです。死者がどうなるかは、知っても知らなくてもよい。というレベルのことでなく、必ず知っておかなくてはならないキリスト教信仰の根幹にかかわる重要な内容です。

4:14 イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずです。

聖書には、死は「最後の敵」だとあります。死という冷酷な事実の前に人間は無力です。愛する者と突然引き裂かれ、泣き悲しむ以外にどうすることもできなくなってしまいます。ヨハネの福音書の中に、イエスが十字架にかかれる前にベタニアを訪れる記事があります。親しくしていたラザロはすでに亡くなっていました。泣き悲しんでいる姉妹マリヤの姿、また一緒にいたユダヤ人たちが泣いている姿を見て、イエスは「霊に憤りを覚えて、心を騒がせて」涙を流されたと記されています。イエスは姉妹たちに同情し、寄り添われたと同時に、死というものが、罪というものが、サタンがこれほどまで人に悲しみを与えることに憤り、涙を流されたのです。そしてあの特別なラザロの復活の奇跡を行われます。「ラザロよ、出てきなさい!」主の大きな号令によって、ラザロはよみがえりました。この奇跡は携挙の時に起きる、死んだ信者たちの復活の型となっています。

ここからイエスは「最後の敵」である死に勝利するために、エルサレムに上られるのです。イエスキリストは私たちの身代わりになって罪を背負い、十字架上で死に、墓に葬られ、三日目に復活されました。これこそが福音ですが、この福音を信じる者には、死んでも復活する約束が与えられています。これは主イエスご自身の約束であり、信じるに値するものです。

イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」 (ヨハネ 11:25)

すでに死んだキリスト者が必ず復活する根拠、保証は何でしょうか。それはイエスの復活です。イエスが死んで復活なさったのなら、イエスを信じる私たちはキリストにつき合わされた者として、キリス

トが復活したように復活するのです。パウロはこのように断言して、テサロニケ教会の人々に悲しみに沈む必要はないと慰めています。

愛する者が死んだとき、悲しみを感じるのは当然です。しかしキリスト者は、死んだらすべて終わりと考えている人たちのように悲しむ必要はありません。キリストにあって死んだ者にはこの復活の希望が与えられています。

2. 生き残っている私たち

4:15 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きています私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。

すでに死んだ信者たちについて述べたパウロは、次にキリストが再臨された時に生きています者について説明します。15節の冒頭、パウロは、私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。と言っています。実はパウロ以前は、携挙についての啓示は与えられていませんでした。このテサロニケ人への手紙の重要性は、使徒パウロが主イエスご自身から啓示をうけて、誰にもまだ知らされていなかった携挙の奥義について、詳細に書いてくださっているということです。

生きています私たちは、主の来臨まで残っているなら

初代教会の人々は、すぐに主が再び来られると信じ、その期待と緊迫感の中で信仰生活を送っていました。それはパウロも他の使徒たちも同様でした。パウロは主の啓示で携挙がいつあるのか、その時は教えられていませんでしたが、その優先順位は示されていました。つまり死んだ信者たちが先に栄光の体へと変えられ、そして次に生きています信者たちの順です。

3. 空中再臨と携挙

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

次にパウロは、荘厳な空中再臨と携挙の光景を具体的に預言しています。

号令と

(1) 号令がかかります。これは、<ケリュースマ>軍隊用語で、兵士が上官から下される命令のことです。サタンとの最後の戦いを暗示させるものです。おそらく父なる神の号令だと考えられます。それは後で説明します。

御使いのかしらの声と

(2) 御使いのかしらの声が響きます。これは、大天使ミカエルのことです。ミカエルが父なる神の号令を復唱します。

神のラッパの響きとともに、

(3) 神のラッパが鳴り響きます。ラッパとあるこれは角笛です。(音を聞いてみましょう)旧約聖書ではラッパは祭りや勝利のしるしとして用いられます。

ラッパに関しては、別の箇所にもこのような記述があります。

「人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。」(マタイ 24:31)

「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」(Iコリント 15:52)

主ご自身が天から下って来られます。

(4) キリストご自身が天から下って来られます。

花婿なるイエスキリストが花嫁である教会を迎えに来られるのが空中再臨です。キリストは天から降りてこられますが、地上に降りてこられません。空中で待っておられるのです、ですから空中再臨と言います。

主は初臨の時にこのように約束されていました。

「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったで

しょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとの
迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」（ヨハ14:1～3）

キリストにある死者がよみがえり、

(5) キリストにある死者がまずよみがえる。

テサロニケの教会の人々が心配していたすでに死んだキリスト者はよみがえり、初めに栄光の体へと変えられます。

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会う
のです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、

(6) この時生きているキリスト者が、復活したキリスト者と一緒に雲の中に引き上げられる。

次にこの時に生きている信者が、キリストと同じ栄光の体へと変えられて、よみがえった信者と一緒になり（これこそが公同の教会であり、花嫁である教会です）雲に包まれ引き上げられます。雲とは神の栄光（シャカイナグローリー）のことです。これが教会の携挙です。

空中で主と会うのです。

(7) 主イエスはこの時、地上に降りることはなさいません。私たちが待ちに待った瞬間。花婿なるイエス様と、花嫁である私たち教会は空中で顔と顔を合わせ出会うのです。今日のタイトルである「キリストの空中再臨と教会の携挙」は同時に起きる出来事であることがわかります。

こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(8) この箇所は今日の御言葉の頂点であり、私たちクリスチャンの望みと慰めの根拠です。

携挙のあと地上はしばらくして、人類は史上最も困難な時代である7年間の患難時代を迎えます。花嫁なる教会は、この主の怒りの裁きから避難して、天の仮庵で花婿なるキリストと過ごします。

この空中再臨と携挙は、興味深いことに花婿イエスと花嫁教会としてユダヤ式結婚式の形で進みます。ユダヤでは結婚が決まり、婚約の期間が終わると、花婿が花嫁に「さて、お迎えに上がりますので、庭に仮庵を作ります。準備して待っていてください。」と宣言してから、自宅の庭に仮庵を建てます。それは花婿の父のチェックが何度も入り、長いと一年ほどかかる人もいるそうです。そして父親のOKが出ると、父親のラッパの音と共に、夜花嫁を迎えに行きます。それがいつなのかは父親しか知りません。花嫁は一年の間、いつお迎えが来るかわからないので毎晩支度を整え、化粧をして参っています。そしてラッパの音が聞こえると、自宅近くまで花婿を迎えに出ます。花婿と花嫁は婚宴までの間1週間（7日間）二人だけで仮庵で過ごします。その後親族だけで結婚式が行われ、披露宴となります。

ユダヤ人の多くが、キリストの初臨と再臨を理解していません。初臨のメシヤは苦難のしもべとして（人類の罪の贖いのために）、また再臨のメシアは王の王（地上を治めるため）二度来られることを知りません。そのため、彼らはイエス・キリストをメシヤと認めることができていません。今も多くのユダヤ人がメシヤの到来を待っています。同様に、クリスチャンの多くが、携挙と再臨の違いを理解していません。再臨には、空中再臨と地上再臨があります。今日学んだように空中再臨と携挙と同時に起こります。携挙とは教会が天に挙げられることです。空中再臨（携挙）→患難時代→地上再臨→千年王国と続きます。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

私たちクリスチャンにとって、携挙とは生きていても、その時すでに死んでいても、全てに優る希望なのです。パウロは、この携挙への希望をもって教会が互いに励まし合うよう勧めています。再臨の希望を語らないキリスト教は、聖書的キリスト教とは言えません。聖書のことばは一点一画に至るまで必ず成就すると信じた人は、幸いです。

おわりに

私たちの国籍は天にあります。私たちはそこで神と共に永遠に住まい、幸せであるようにと造られました。この世も死も終わりではありません。この世にも死にも最終決定権はありません。私たちはキリストにあって、天の国の国民とされているからです。

毎日、イエス様との交わりを深めましょう。そうするにつれてこのお方にお会いし、いつまでも共にいることができる携挙がどれほど待ち遠しく、歓迎すべきものだと思えることができるようになります。

今日、様々な痛みや、病、疲れを感じておられる方がいらっしゃるでしょうか。健康問題、経済の困難、人間関係、将来への不安など、この世のことですぐに頭がいっぱいになってしまうのが弱い私たちです。でもそれは永遠には続きません。携挙の時にはあなたの体は何一つ欠けた所のない者となり、神の栄光によって輝くのです。

愛する兄弟姉妹、天国がはるかに遠く思える時、また自分が窮地にあると感じる時、イエス様がいつも私たちのすぐ隣で共に歩んでくださっていることを思い出しましょう。そしてこのお方が必ず迎えに来てくださることを思い出しましょう。祈りの中で感謝し、「マラナタ、主よ来てください。」と喜び待ち望む教会となりましょう。